

デジタル技術の発達と「出版」のこれから

飯野 守

文芸科

The Evolving Notion of "Publication" under the New Digital Technology

Mamoru Iino

Department of Literary Studies

1. はじめに

インターネットに代表される、コンピュータを利用したデジタル情報のやり取りの急速な普及にみられるように、今、わが国のメディアのデジタル化の動きは急である。

最近では、テレビ放送のデジタル化のスケジュールも話題となっている。CS (Communication Satellite=通信衛星) 放送はすでに96年からデジタル放送を始めている。また、BS (Broadcast Satellite=放送衛星) デジタル放送の開始も目前となっており(2000年から)、さらには、郵政省の計画では、地上波デジタル放送の試験放送も2000年からスタートすることになっている。私たちを取り巻くメディアが次々にデジタル化されようとしているのである。

一方で、デジタル化技術は、印刷・出版界にも大きな変化をもたらした。特に、80年代末になると、編集や割付けをコンピュータのディスプレイ上で済ませてしまうシステム(DTP=Desktop Publishing)の本格導入がなされ、他方で、80年代の中頃からは紙以外の媒体による「電子出版」⁽¹⁾も始まって現在に至っている。これらはいずれも、一連の出版の過程をデジタル信号の流れに置き換えることにより実現した。

このうち電子出版は、その形態により、CD-ROMによる出版のようなパッケージ系と、主としてインターネット上のデータの形をとるネットワーク系に分類でき、いずれもすでに多くの人々に利用されている。

そこで、本稿の課題の第一は、「出版」の新しい形として、上述のような電子出版や、デジタル技術を駆使した新しい印刷・製本システムを素描することにある。次に、この素描を踏まえたうえで、他のメディアと比較した場合の出版物の重要な特性の一つとして、他品種少量(小部数)生産ということが強調されること、および、出版という営みが危機に瀕していると指摘されることに鑑みて、第二の課題として、新しい様々な技術やシステムが、出版という営みの活性化にどのように活用できるのかを考えることとする。

以下、第2章では、出版の新しい形のうち、パッケージ系電子出版とネットワーク系電子出版を、また、第3章では新しい印刷・製本システム(プリント・オン・デマンド)を取り上げ、それぞれについての概略を紹介したうえで、第4章で、これらの技術の進展が、伝統ある「出版」を活性化するどのような可能性を秘めているかを検討することとする。

〔注〕

(1) 「電子出版」という語は、本来は出版物を電子的な方法で出版することを指すが、本稿では、電子的な方法で作成された出版物をCD-ROMのような紙以外の媒体（メディア）で出版することに限って、この語を使うことにする（渡辺武達はか編『メディア用語を学ぶ人のために』（世界思想社・1999年）225頁参照）。

2. 出版イメージの変容 I - パッケージ系電子出版とネットワーク系電子出版

1 パッケージ系電子出版

パッケージ系電子出版の代表は、CD-ROM (Compact Disc Read Only Memory) を記録媒体として用いる出版である。CD-ROMは音楽用CDと同じ直径12cmの円盤で、約650MBの読み出し専用の記憶媒体であり、大容量かつコンパクトで、ランダムなアクセスが可能であるという特性を持っている。

この大容量とコンピュータを利用した多様な検索機能を生かして、百科事典（マルチメディア百科事典などと称されるもの）のようなヒット作が現れている。これらは、文字・静止画・音声・動画などを、インタラクティブな操作により引き出すことができるものである。また、いわゆるマルチメディア的作品ではないものの、紙版では全35巻にもなる百科事典をわずか2枚のCD-ROMに収め、検索・探索機能を高度に充実させた『世界大百科事典』（日立デジタル平凡社・1998年）も注目される。これは、百科事典をいわば人類の財産として利用し尽くす発想に基づくものである⁽²⁾。

このような百科事典やこれと性格の類似した辞典類の電子版は、検索機能に代表される利便性において、すでに紙版の到底及ばないレベルに達している。特に百科事典の領域では、紙版の存在理由は失われつつあると言ってもよいほどである。

他方でまた、絵本のような娯楽作品にも多

くの優れたCD-ROM作品が生まれている。これらもコンピュータを利用したインタラクティブな操作を行うことにより、必要な情報や機能やアクションを引き出すものである⁽³⁾。

さて、このように数多くのCD-ROM作品が「出版」されているが、ここでCD-ROMが持つメディア（記憶媒体）特性を、「出版」という視点から整理すると、次のようになる。第一に、大容量の記憶量を持ち、高度な検索・レファレンス機能を実現できるので、百科事典のような大部かつ検索が重要な「本」には最適の媒体だった。最近では、インターネットと連動させることにより、当該事項に関する最新情報やより詳しい情報を得ることができる機能を付加することにより、情報の陳腐化を補うこともできる作品も多くなっている。このようなことも紙版では不可能に近かったのである。また、第二に、このメディアを用いれば、文字とともに音声・動画を供給することも可能で、さらに第三に、安価に複製ができ、かつ本に似たパッケージを着せることにより流通に乗せやすいうえ、さらに、一部の作品では既存のコンテンツ（文章や映像など、メディアを通じて伝達される内容）を流用して制作が可能だったことから、出版界にとっては親しみやすくかつ優れた媒体だった。

けれども、CD-ROMには、これを「出版」のメディアとしてみたとき、次のような問題点もまた指摘できる。

第一に、CD-ROM自体は極めてコンパクトかつ軽量なものであるにもかかわらず、その読み出しにはコンピュータが必要だという点が問題となる。コンパクトなCD-ROMもその読み出し装置を考えると、操作の簡便さや読みやすさ、および、携帯性の面で紙版の本に及ばない面があるのである。さらには、CD-ROM自体には書き込みを受け入れる機能も備わっていない。これらの点は、

記録装置と再生装置を兼ね、また、文字や図版の再現性が良好なメディアである紙を用い、それを束ねて綴じることにより冊子体として供給される、携帯性に優れた紙版の「本」が依然優位に立つ点である。また、第二に、CD-ROMといえども本来的に容量の限界を持つのであり、そもそもデジタル化されたコンテンツの配信にパッケージが必要なのかという問題もある。さらに、第三として、制作に伴う初期投資に見合った資金の回収困難という問題も常に存在する⁽⁴⁾。

CD-ROMは「出版」の新しいメディアとして注目されたが、特に、上述の第一の点のような難点があり、出版のメディアとしての限界が指摘されるのである。

上に述べた第一の点に関連しては、「電子ブック」と呼ばれる一連の電子出版物にも触れる必要がある⁽⁵⁾。これは、CD-ROMによる出版物がパソコンとその操作を必要とするという点を意識して、携帯可能な専用の機器による読み出しを前提として生まれた。「電子ブック」はその機器の機能および操作性から、検索を主とする事典類に適しており、『電子ブック版広辞苑』（岩波書店）のような売れ行き良好の作品もある。しかし、現行の機器は画面が小さく、これを読んで楽しむような通常の読書には不適であって、一部の売れ行き良好作品はあるものの、タイトル数も劇的に増えることなく、出版の新しい形として広く普及するには至らなかった⁽⁶⁾。

2 ネットワーク系電子出版

オンラインマガジンに代表されるネットワーク系の電子出版は、コンテンツをパッケージとせずにそのままインターネットで配信するものである。たとえば、『Walkers Net』という角川書店が運営しているウェブ・ページでは、東京・横浜など全国のエリア・ウォーカー誌6誌の情報を無料で見ることができ

る⁽⁷⁾。けれども、この種のもの、これを「電子出版」と呼ぶとしても、本来的にネットワーク上の通常のデータの一つと変わらないものである。

これに対し、より本格的なネットワーク系の電子出版といえるものも現れている。日本でも、すでに複数の「電子書店」がコンピュータや特定の機種のパDA（Personal Digital Assistants=携帯情報端末）向けに電子版の「本」を配信するサービスを行っている⁽⁸⁾。そして、これをさらに発展させたのが、ダウンロードした電子版の「本」を携帯可能な専用の読書端末で読むシステムである。すでに別稿で紹介したが、このシステムでは、紙が不要で、印刷や物流の経費もかかることなく、原理的に返品もあり得ない⁽⁹⁾。

98年秋からアメリカでサービスが始まっている、ソフトブック・プレス社のシステムは、「世界初の完全なペーパーレス読書システム」として発表された⁽¹⁰⁾。このシステムは、ソフトブック・リーダーと名付けられた、A4サイズで重さ2.9ポンド、画面サイズ15.2cm×20.3cmのモデム内蔵の専用端末に、電話回線から電子版の「本」をダウンロードして液晶画面で内容を楽しむものである。このリーダーは、1,500ページ分のコンテンツ（2MB）を収容可能な電子読書端末であり、紙版の本と同様にページだてされた「本」を、カバーを開けるだけで簡単に読書可能となる。

ソフトブック社のシステムは、このように、電子版の本を読むにあたってコンピュータの操作を必要とせず、紙版と比較して違和感のないように工夫された端末を提供する点に特徴がある⁽¹¹⁾。また、より小型のヌヴォー・メディア社のシステムも98年からサービスが始まっている⁽¹²⁾。

これらのアメリカのシステムに対して、日本では電子書籍コンソーシアムという組織により、電子版の「本」を読者に配信するシス

テムの実験が99年11月から始まる⁽¹³⁾。この実験では、出版社発のコンテンツは「電子化センター」による電子化の処理を経て二つのルートを通じて読者に届けられる。

その一つは、インターネット経由で家庭などのコンピュータに送られ、「PCビューア」というソフトで読むことができるルートである。けれども、注目されるのはもう一つのルートであり、こちらのルートの場合、「本」は通信衛星を経由して、書店やコンビニなどに新たに設置される販売端末から専用の読書端末にダウンロードされ、読者はこの読書端末の液晶画面で内容を読むのである。この専用の携帯読書端末用には、極めて高精細の液晶ディスプレイ⁽¹⁴⁾が準備されるとともに、5,000タイトルの電子版の「本」も揃えられることになっている。

電子書籍コンソーシアムの実験は、始まろうとしている段階であり、同会が「電子書籍」に関する規格を整備し(注(13)参照)、魅力的なソフトを整えようとする姿勢は極めて重要である。ただし、今回の実験は、紙版の本として発行された本をスキャナで画像(画像情報)として取り込み電子化することにより行われる⁽¹⁵⁾。

3 出版の一つの形としての読書専用端末の有用性

それでは、この読書専用の携帯端末のシステムは、出版界にとりどのようなメリットをもたらすものだろうか。

そもそも日本の電子書籍コンソーシアムのプロジェクトは、従来の電子出版がコンピュータの存在や機能にとらわれすぎていたとの反省に立って、従来の書物の可搬性の高さ、可読性の高さを継承し、内容も、コミック(マンガ)を含む通読型の書籍に対応できるもの、という発想から生まれたものようである⁽¹⁶⁾。そうすると、そこにあるものは限りなく紙版

の本に近い電子版の「本」ということになる。

確かに、先行するソフトブック社のウェブ・ページでも、操作が簡単でフルページ表示がされ、ページだてがされていてスクロールの必要がないなど、「本のような外観と雰囲気」("Book-like look and feel")を持つことが、その提供するリーダーの特色としてあげられている。要するに本の延長上にある電子版の「本」という位置づけであり、同時に、専用端末が従来の紙版や電子版の「本」を超える部分として、①ダウンロードにコンピュータを必要としないこと、②本体に1,500ページのコンテンツを収容可能であり、また、ディスプレイが大型でバックライト付きであることなども強調されるのである⁽¹⁷⁾。

上の①の点は、これまでの電子版の「本」であるCD-ROM版や通常のインターネット上のデータの形をとった「出版物」と較べた場合に、簡便性において優位に立つ点である。また②は、従来の紙版の本と比較した場合に優位に立てる点であろう。このシステムによれば、ベストセラーの本を瞬時に入手でき、何冊もの本を持ち歩くことなくいつでもどこでも読め、また、バックライトの機能により照明さえ選ばずに読書に親しむことができることになる。これは読者にとっては、たとえば旅行のような場面で極めて有効なことに思われる⁽¹⁸⁾。また、PDAのような情報機器に馴染んだ世代には、液晶画面で電子版の「本」を読むという習慣も、比較的容易に受け入れられる可能性はある。

けれども、これだけであれば、読書端末は単に新しいメディアとしての新規性を売り物とするに過ぎないことになりかねない。特に、日本のように出版界全体の市場規模が極めて小さい国では(注(25)参照)、膨大な開発・導入費用を支出して、新たに紙版の本の市場の脅威となる、競合するメディアを立ち上げることになる恐れもあるのである。

そこで、ここで注目したいことは、このような電子版の「本」が、返品率の異常な高さや学術出版の困難など、現在の日本の出版界が抱える問題の解決に何らかの貢献をするものかどうかという点である。

ソフトブック社のウェブ・ページの出版社向けの説明中では、電子出版により、品切れをなくし、絶版となるべき本の寿命を延ばすことができること、紙版の出版の負担には通常見合わないようなタイトルの頒布もできることなどがあげられている⁽¹⁹⁾。

この点は、電子書籍コンソーシアムもほぼ同様である。同会のウェブ・ページを見ると、軽量で場所を取らないといった点とともに、紙代、印刷代や物流経費が不要なこと、絶版の必要もないこと、品切れがなく本の過疎地もなくすことができることなど、電子版の「本」のメリットが、縷々説明されている⁽²⁰⁾。

そこで、日米の両システムのウェブ・ページで説明されていることを基に、日本の現状に即してこのシステムの有用性を考えると、このシステムでは、需要が少なく、通常の紙版の出版方法では資金回収が難しいようなタイトルも出版できる可能性があり、絶版も品切れもなく、さらには原理的に返品もないことになるという点が重要である。

読書端末は、このような可能性を秘めた「出版」の形である。けれども、このシステムは発展途上であり、この新しいシステムを現在の出版の危機を解決するために生かしていく方向に発展させるか、または、単なる新規性を売り物とした、紙版と競合するメディアとするかは、結局は、このシステムの運用側の姿勢次第ということになろう。特に日本の場合について言うならば、単に売れ筋のベストセラー作品やコミックスをデジタル化しただけであれば、それは、やはり競合する新しいメディアを生み出したことに止まることにならざるをえないと思われるのである。

〔注〕

- (2) 後の「第2版プロフェッショナル版」(1998年)は、DVD-ROM (Digital Versatile Disc Read Only Memory) を含む5枚組で売られている。この電子版『世界大百科事典』は、単にデジタル・コンテンツを安易に利用したものではない。この点につき、龍沢 武「『世界大百科事典』を電子化する」(別冊本とコンピュータ1号110頁以下(1999年))参照。百科事典を本格的にデータベース化することを目指してデジタル化に取り組み、あえてマルチメディア化(テキストに、音声・静止画・動画を付加することを指す)の方向を取らず、検索機能の充実を第一の目標とした編集方針が明らかにされている。
- (3) 代表作については、拙稿「電子出版覚え書きー『ルル』のことなど」(文芸論叢35号38頁以下(1999年))参照。
- (4) たとえば、紙版では全35巻で248,000円で売られている『世界大百科事典』(平凡社・1988年)は、これに数種類の検索・探索機能やリンクなどの電子出版としての極めて高度な加工がされ、DVD-ROMが添付された「第2版プロフェッショナル版」でも59,000円で販売されている。百科事典のような企画を新たに電子版としてゼロから立ち上げることは不可能と言える。
- (5) 直径8cmのCD-ROM(200MB)をメディアとして利用するもの。読み取り専用機としては、「データディスクマン」(ソニー、1990年発売開始)が最初に発売された。
- (6) 電子ブックの新刊点数は92年の47点をピークとして、96年まで減り続け、97年に学習補助教材や趣味的作品の新刊により一時的に盛り返したものの、98年にはわずか10点となってしまった。今後の需要は、事典・辞書類や、『知恵蔵』(朝日新聞社)のような年版の専門用語集、あるいは、学習補助教材などに特化していくものとみられる(出版科学研究所『出版指標年報』(1998年版)301-2頁、(1999年版)297頁参照)。
- (7) <<http://walkers.channel.or.jp/>>。ただし、提供される情報は限られており、必要に応じて本誌を買わなければならない。また、『Web新潮』の井上夢人作『99人の最終電車』(1996年からウェブ・ページで連載開始) <<http://www.webshincho.com/99train/>>のようなインターネット上で書き下ろし小説も多数現れている。

- (8) 「電子書店パピレス」(フジオンラインシステム)、「光文社電子書店」(光文社)が「ザウルス」(シャープ)向けにサービスを行っている。
- (9) 拙稿「電子出版の新しい形—携帯読書端末の試み」(Join34号56-7頁(1999年))参照。
- (10) *Press Release* (June 15, 1998), *SOFTBOOK PRESS* <<http://www.softbook.com/consumer/press/>> から。
- (11) *SoftBook Reader*, <<http://www.softbook.com/enterprise/solutions.asp>> による。端末の買い取り価格は、一時払いの場合で599.95ドルで、他の支払い方法もある。オプションのフラッシュメモリー・カードを用いれば、50,000ページ収容可能。
- (12) ヌヴォー・メディア社のものは「ロケット・eブック」と名付けられている。こちらは、購入費用は349ドル、小型の単行本サイズ(ほぼ四六版の本の大きさ)で重さも22オンス(627g)と、ソフトブック・リーダーより小型だが、コンピュータを使用することが前提となる。すなわち、コンテンツをインターネット経由でコンピュータにダウンロードして、専用ケーブルか赤外線で端末内蔵の4MBのフラッシュメモリーに読み込ませるもの。液晶画面の大きさは8.9cm×14cmで、保存可能なコンテンツの量は最大約4,000ページ程度(ただし、本体にカードスロットを備えており、オプションのメモリーカードの使用により16,000ページまで収容が可能)(*About the Rocket eBook*, *ROCKET eBook* <<http://www.rocket-ebook.com/Products/>> による)。
- (13) 電子書籍コンソーシアム <<http://www.ebj.gr.jp/>> は、出版社、通信事業者、書店など140を超える企業が参加する会である。その目的は、電子書籍に関する読書端末などの標準化、および、「ブックオンデマンドシステム総合実証実験」などであり(規約2条)、存続期間を2000年3月末までに限っている(同26条)。また、この会という「電子書籍」とは、この会が「規定する電子書籍フォーマットに準拠した電子化された書籍」の意である(同3条)。歌田明弘「電子書籍実験は本の未来をひらくか」(季刊本とコンピュータ6号62頁以下(1998年))、小林龍生「電子書籍コンソーシアムとBOD総合実験の現在」(出版ニュース1999年4月中旬号6頁以下)、拙稿「電子出版の新しい形」(前掲注(9))参照。
- (14) 報道では、ルビまで読めるような、175dpi(1インチあたり175ドット)程度の極めて高精

細な液晶画面が使われるという(小林(前掲注(13))8頁参照)。

- (15) 画像情報として既存の本を電子化すると、検索機能のような電子版の本としての特色を盛り込むことは難しくなるが、一方でこのことには積極的意味もある。すなわち、①コミックのような図版をそのまま生かすことができ、②さらに文字に関しても校正が基本的に不要で、ルビを含む印刷面をそのまま生かすことができ、加えて、③コンピュータ固有の漢字制限というような問題も回避できるのである。
- (16) 小林(前掲注(13))7頁参照。電子書籍コンソーシアムの「基本構想」には、さらに、低廉なコストで大量のコンテンツの電子化を目指すこと、マンガや多様な表現への対応を踏まえ、「既存書籍を画像として取り込む方法を基本とする」などが含まれるとされる(小林龍生「『紙』の役割を代替できるか、できないか」(新聞研究575号26頁、1999年)参照)。
- (17) *SoftBook Reader* (前掲注(11))による。
- (18) *What readers are saying*, <www.rocket-ebook.com/Products/usercomments.html> を参照。
- (19) *Publishing Partners*, <<http://www.softbook.com/consumer/partners/>>
- (20) 「設立趣意書」<<http://www.ebj.gr.jp/a01.html>> 「『電子の本』の新しい試み～電子書籍コンソーシアムの狙い」<<http://www.ebj.gr.jp/active/b0101.html>> 参照。

3. 出版イメージの変容Ⅱ—オン・デマンド出版

出版の新しい形のうち、前章でみた電子版の「本」は、その方向性の面では未だ未知の要素を含む。これに対して、オン・デマンド出版は、その出来上がりは従来と変わらない紙版の本そのものを短時間で提供する方法であって、その効能はより明確である。

オン・デマンド出版は、高精度のレーザープリンタと製本機が組み合わされた、オンライン化された印刷製本システム(Print on Demand=プリント・オン・デマンド)による出版である⁽²¹⁾。このシステムを用いることにより、必要なフォーマットに沿ってディジ

タル化されたコンテンツがあれば、必要などに必要な部数を数分以内に印刷・製本し、完全な紙版の「本」の形で読者に提供できる。

日本でも最近、日本出版販売（日販）がブックキングという新会社を設立して、絶版・品切書のデジタル・コンテンツを出版社から預かり保存したうえ、読者からの注文ごとにこのシステムで印刷・製本して販売すると報道され、話題となっている⁽²²⁾。

このシステムは、これを「出版」のシステムと考えたとき、何よりも、紙版の本を提供するもので従来の伝統的な出版概念と違和感なく接続する点が重要である。そのうえで、このシステムの可能性を考えてみたとき、次のような重要な特性が指摘できる。

第一に、いわゆる小部数出版が可能である。たとえば、数百部程度の需要しか見込めない出版物も過大なコスト（出版に伴う実費負担）に悩まされることなく紙版の本として出版可能である⁽²³⁾。第二に、このシステムによれば、ハードコピーでの在庫をゼロとして、注文に応じて「本」を制作することが可能となり、他方で、読者からの注文には瞬時に対応できる。このことは、需要をあらかじめ見込んで本を大量に見込み生産せざるを得ない従来のシステムから脱却し、売れ残り品の処分に伴うコスト負担や資源の浪費をなくす可能性も秘めているとともに、絶版をなくして一冊の本を末永く売ることにも可能とするのである。

そして、第三に、フォーマットに従ってデジタル化されたコンテンツを通信回線を経由して送ることにより、このシステムを備えた場所であれば世界中どこでも、読者が求める場所で必要な時に紙版の「本」を印刷製本して読者に手渡すことも可能となる⁽²⁴⁾。この第一と第二の点（おそらくは第三の点も）は、前述の携帯読書端末の有用性とほぼ重なるけれども、オンデマンド出版は、従来通りの紙版の本を提供する新システムである点に、最

大のポイントがあるのである。

このシステムは、現時点ではページごとに両面コピーされた紙葉を簡易製本するもので、いわゆる折り丁（16ないし32ページ分を折りたたんで一まとめにしたもの。製本の際の一単位となる）を作ることができないという問題がある。しかし、紙版の本を少数数でも極短時間に供給できるこのシステムは、日本の出版の現状を考えたとき、その活性化にとり極めて有効なシステムと言えるだろう。

〔注〕

(21) ドキュテック (Docu Tech, ゼロックス社・1993年販売開始) に代表されるこのシステムの簡潔な解説として、中西秀彦「オン・デマンド印刷がやってきた」(季刊本とコンピュータ 8号70頁以下 (1999年)) を参照。博士論文の審査用5部、訂正を経た確定版200部というような印刷にも簡単に対応でき、その印刷の品質は従来の「オフセットとくらべて遜色ない」と断言できる」という (74頁)。

(22) 流通サービス新聞1999年7月13日。

(23) スウェーデンのMAJA-BRITA MOSSBERG, ONE BOOK AT A TIME—PRINT ON DEMAND (TELDOK REPORT 122e, 1998) (以下、TELDOKレポートとする) を参照。同レポートは、1970年代に出版物の自由価格制を導入し、書店が激減しているスウェーデンの国情に即して、プリント・オン・デマンドが及ぼす影響の可能性を論じたもので、デジタルとネットワークの技術が「ビッグ・セラーでない本、現代の時流に乗っていない本、そして、国際的な主要言語の一つで書かれていない本の出版を魅らせ、流通を改善」できるか (p. 7) という問題関心で書かれている。

同レポートは、BOOKS-ON-DEMAND (<http://www.books-on-demand.com/>) を通じて、PDFファイル版とオン・デマンド本版が入手できる。

このシステムの利用はむしろ小部数出版の場合に限られるのであり、大部数を出版する場合には通常のオフセット印刷の方が安くできる。もちろん、従来の印刷・製本システムでも小部数の出版は可能だが、刷版を必要とする従来の方法では手間と費用が膨大となる。この辺の事情につき、中西 (前掲注 (21)) 70-1頁を参照。

04 前述のTELDOKレポートは「世界中のどの場所(または国)であろうと、消費者が住むところで」本を制作することを、スウェーデンで予想される「発展の次の段階」としている(TELDOKレポート(前掲注(23)) p.14)。

4. おわりに—多様な「出版」の形の中で

数百万部も売れるベストセラーから数百部程度の需要しか見込めない少部数の本までがそれぞれに出版可能なのが、新聞のような他のメディアと比較した場合の出版の特性である。このことにより、出版という営みは文化の形成や学術の発展、教養の普及の上で大きな役割を果たしてきた。

単に情報の発信ということに限るならば、流行のメールマガジンに代表されるシステムを利用したり、ウェブ・ページを開設することにより、たとえ個人であっても、インターネットを経由しての発信が可能である。しかし、それは生の情報発信でしかない。今社会が何を求めているかを把握し、適切な著者に依頼し、必要な内容を吟味し、読みやすく整えて読者に提供するの、やはり編集者と出版社の手になる出版の役割である。そして、この出版という営みがこれからも役割を果たしていくためには、出版を通じての再生産に必要な何らかの利益を確保できるシステムを維持しなければならないのである。

翻って、日本の現実の出版事情をみると、年間6万タイトルを超える新刊書が刊行されており、新刊タイトル数の徒な増加が目立つ。一方で、返品率が異常といえるほど高率で、出版物全体の売上げはマイナス成長となっている。出版の世界は深刻な「危機」的状況にあるといえるのである⁽²⁵⁾。このような中で、学術の発展の基礎となるような学術書や、人々の思索に役立つ基本文献のような、ベストセラーとはなりにくい本の出版がますます困難となっている。また、返品率が異常に高いという事実は、環境問題としても見過ごせない

問題を含んでいる。

このような現実を鑑みると、紙代、印刷代や物流コストをなくすことが可能で、需要の少ないタイトルも出版できるシステムとして、ソフトブック・リーダーのような読書端末の試みに注目しても良い。可搬性に配慮した端末が広く普及すれば、読者にとっては紙版の本が宿命的に持つ重量・体積という問題を回避することができる妙手ともなり得る。

ただ、前述のように、このシステムはいまだ未知の要素を多く含んでいる。これが将来発展をして、単にベストセラーを気軽に(そして安価に)読む端末以上の意味を持ち得るか否かは、偏にシステム運用側の姿勢にかかっているといわざるをえないのである。

一方、オン・デマンド出版は、本来的に紙版の出版でありながら出版界に大きな変動をもたらす可能性を秘めたシステムである。前述のように、これにより専門書や市場が限定された必然的に極少部数の出版にも対応できるので、出版社は印刷や流通の経費負担に悩まされることなくタイトル数を確保できる。また、この技術の進展によっては、従来の見込み生産のシステムから脱却し、出版社が従来のように大量に印刷・製本して返品のを抱える必要がなくなる可能性もあるのである。

技術革新の必要はあるものの、このシステムは出版界にとっては多品種少量(少部数)出版の実現を可能にする待望の、かつ極めて現実的なシステムと言って良い⁽²⁶⁾。

以上のように、新しい様々な技術・システムを現実の出版の危機的状況に照らしてみたとき、オンデマンド出版に上述のような現実的可能性があることが指摘できる。一方、読書端末のシステムについても、これを単にベストセラーや売れ筋商品の新たな供給源とのみ見るのではなく、学術出版なども含む多様なコンテンツの供給源として発展させることができるならば、将来、有用な新しい出版の形

に成長する可能性があると思われる。

いずれにしても、これらの新技術・システムが「出版」を甦らせるためにどのように役立つかは、偏に、出版する側が現在の「危機」をどのようにとらえ、どの方向に変えようと望んで、これらを活用するかにかかっているのである。

〔注〕

㉕ 98年の1年間の書籍の新刊点数は65,513点、返品率（金額）は41.0%（いずれも、統計開始以来最高）。そして、出版物（書籍・雑誌）の販売金額の総計は、97年に次いで2年連続のマイナス成長となった。出版界全体の出版物の販売金額の総計（98年）は、わずか2兆5,415億1千万円である（『出版指標年報』（1999年版）（前掲注（6））6-12頁による）。

㉖ 多様な出版物の出版を可能とするものとして、オンデマンド出版に注目する出版人は少なくない。ペーテル・クルマン「オン・デマンド出版へ／欧州評議会、支援に向かう」（季刊本とコンピュータ8号169-70頁（1999年））、TELDOKレポート（前掲注（23））p.9参照。

（1999年9月22日）